

円山応挙没後の植松家と京の画家の交流—岸派との関係を中心に—

岡田 秀之（福田美術館）

東海道 13 番目の原宿（現在の静岡県沼津市原）にあった植松家は、江戸時代初期から同地に住み、広大な土地を所有する郷士で、代々米や塩などを商っていた。街道に面した植松家の家宅には、植松家第 6 代当主・植松季英（1729—1809）によって整備された庭園があり、多くの花木が植えられていた。この庭園はのちに「帯笑園」と呼ばれ、日本各地を旅行したシーボルトも文政 9 年（1826）2 月 29 日に同地を訪れたことで知られている。

植松家と、東海道を往来した文人墨客、とくに池大雅や円山応挙（1733—1795）、曾我蕭白など 18 世紀に京で活躍した画家たちとの交流は、菅沼貞三、佐々木丞平氏らによる詳細な研究がある。1978 年に東京国立博物館に寄贈された作品は、同館の常設展示室で定期的に公開され、1995 年に『東海の名園に遊ぶ 植松家と文人墨客』（1995 年、佐野美術館）が開催された。発表者は 2013 年から複数の寺院や個人に分蔵されている資料の調査を行い、およそ 1700 点の下絵の考察や季英が京に滞在した記録を紹介したことがある。

植松家と応挙の関係は、季英の息子である季興（1774—1831）とその弟久五郎（1779—1797）が応挙に弟子入りしてから親密になった。彼らは毎年京に長期滞在し、応挙宅で指導を受けていた。寛政 7 年（1795）7 月、応挙が没して以降も、円山応瑞や弟子の源琦、長沢芦雪、呉春などとも関係があったことが、彼らが植松家に宛てた書簡などから判明している。

本発表は、植松家と円山応挙没後の京の画家との交流について、岸駒（1749 または 1756—1839）を祖とする岸派を中心に考察する。岸駒は加賀国金沢に生まれたとされ、安永 8 年（1779）から京に住み、中国絵画や洋風画など様々な画風を学びながら独自の画風を確立した。植松家と岸派との関係は、寛政 6 年、京に長期滞在していた季英が岸駒を訪問したことに始まる。このとき岸駒は自らの絵について「花鳥ハ林良、人物は黄筌、山水は馬遠、夏圭、王摩吉（詰）を学んだ」と説明したことが、季英の滞在記録から確認できる。季英が入手した岸駒作品は、同年 8 月原へ帰る季英への餞別として送った「梅図」が最初で、「山水図」や一行書、岸駒の印譜など多種多様な作品が伝来している。また、款記から制作の経緯が判明する岸岱筆（1782—1865）筆「三星図」、岸連山（1804—1859）筆「双鶴図」など岸駒以降の岸派の作品や、岸派の画家が植松家当主に宛てた 40 通以上の書簡から、季英以降の植松家当主と岸派との交流の様相を考察する。

植松家と円山派との関係は、すでによく知られているが、応挙の没後にはむしろ岸派との関係が深まっていると位置づけられる。このことは、18 世紀末からの京都画壇の動向を注視していたと思われる静岡の名家が、岸派の台頭を認識していたことを示唆している。